

日本キリスト教会大阪北教会
2016年10月9日 聖日礼拝説教

ヨハネによる福音書13章36～38節

「13:36 シモン・ペトロがイエスに言った『主よ、どこへ行かれるのですか。』イエスが答えられた。『わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後について来ることになる。』 13:37 ペトロは言った。『主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。』 13:38 イエスは答えられた。『わたしのために命を捨てると言うのか。はっきり言っておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。』」

説教『主よ、あなたのためなら命を捨てます』

◆今朝の日曜学校では、詩編117篇の説教をいたしました。日曜学校では私が礼拝司会もするのですが、礼拝の最初に子どもたちと一緒に詩篇第117篇を唱和し、礼拝を始めます。今日の日曜学校では高度な説教、会話をしました。この詩編第117篇は、詩編150篇の中で一番短いもので、たった2節です。しかし、聖書全体のメッセージを凝縮した内容がここに込められています。「すべての国よ、主を賛美せよ。すべての民よ、主をほめたたえよ。主の慈しみとまこととはとこしえに、わたしたちを超えて力強い。ハレルヤ。」これが詩篇で一番短いものなのです。私は今日、この詩編を子どもたちと唱えながら、なんとスケールの大きいと言いますか、旧約聖書、新約聖書をその内に満ちし、湛える豊かさを、改めて覚えました。

◆先日、9月25日(日)の午後に、西宮中央教会で講演会がありました。講師は、クラッパートさんというドイツの神学者で、わたしより一つ年上の方で、何年前かにこの北教会でも講演をしていただきました。テーマは「聖晩餐」でしたが、講演の後の質疑応答で、私も質問したのですが、いろいろな質疑があるなかで、クラッパート先生がこういうことを言われたのです。「『ヨハネによる福音書』は、著者ヨハネが、聖書を特に共観福音書のマタイ、マルコ、ルカの福音書を、これらは紀元70年頃までにはできていたのですが、ヨハネによる福音書はそれから30年ぐらい後の、紀元百年前後に出来ているわけですね。ですからヨハネは他の福音書を知っているわけです。それで、「ヨハネ福音書の著者は、それらの共観福音書をメディテーション(黙想)して、そこで語られていることを整理して自分なりに表現したものがヨハネ福音書なのです」と、およそ、このようなことを話されました。だからヨハネ福音書は共観福音書のメディテーションなのだ、という趣旨のことを先生は言われました。

◆それで、今日のヨハネによる福音書を読みながら、クラッパート先生が言われたことが納得できる思いでした。今日の箇所はたった3節です。だけれどもこの3節はある意味では詩編117篇的というか、或る意味では詩篇23篇的というか、そういう豊かさを持った箇所、「これぞ福音！」と言っていいような、実に内容豊かな箇所であります。今日の

日曜学校でも、そのようなことを話したのですが、子供たちなりに理解したようです。日曜学校では、私が一方的に話すのではなく、そんなことを話しながら、時々、「感想をどうぞ」と言ったりします。すると、「イエス様は力強いお方だ」と答えてくれます。「そうだね。だけど、詩篇で『主』という場合、詩編は、イエス様がお生まれになる前にできたイスラエルの人たちの賛美歌だから、この『主』というのは、直接イエス様を指しません。」説明を加えます。けれども子どもたちにとっては、聖書に「主」とあれば、イエスさまと直結しているのですね。「わたしたちを超えて力強い」というのは「わたしたちの理解を超えて」というのが一つの意味で、「わたしたちがこうだ」とする理解をはるかに超えて力強いのです。もう一つの意味は、「わたしたちの理解をはるかに超えている、主の慈しみとまことが、とこしえに、常に、わたしたちの上に、力強く覆っている」という事を指しています。それでまさにこの詩編117篇を、すべての国の人々がこれを本当に自分のものとして言えるようになったら、これが神様の求めておられる平和なんだよ。およそ、その様なことを日曜学校で話しました。子どもたちがこのやり取りで、聖書の骨格に触れたような顔をしていました。

◆それで今日の箇所であります。ここを私は、「人類の歴史を『個人史』という形で描いているように見えて来ました。人間は、人として生まれ、どういうことをなし、どのように導かれ、どういうところまで導いていただけるのかということ、このたった3節で言い表していると思います。「シモン・ペトロがイエスに言った。『主よ、どこへ行かれるのですか。』」イエスが答えられた。『わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後について来ることになる』」ペトロは言った。『主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます』。イエスは答えられた。『わたしのために命を捨てるというのか。はっきり言っておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう』」。このやり取りの後、イエス様は捕えられ、夜中の裁判にかけられるのですが、その間にペトロは三度、イエス様との主従関係を否認するわけですね。すると鶏が鳴きます。午前3時ごろですね。鶏が鳴くまでに、ペトロは、イエスさまとの関係を3度否認するわけです。このように心は燃えていても、弱い人間は、裏切るのですね。罪を犯すのですね。そんなつもりでないのに、犯してしまうと言ったらいいのでしょうか。そうでないような人間は、アダムを初めとして一人もいないと言ってよいと思います。

◆イエス様は、「わたしの行くところにあなたは今ついて来ることはできない」と言われ、ペトロは、「あなたのためなら命を捨てます」と言います。それはイエス様に対するペトロの偽りのない正直な思いだと思いますね。そうは言ったもののイエス様がおっしゃった通りに、鶏が鳴くまでに、「そんな人は知らない、知らない、関係ない」と否認いたします。そこでペトロはイエス様がおっしゃったことを思い起こして大泣きすると書いてあります。この時はそうでした。けれども、「伝承」によれば、つまり、聖書に書かれていないことだけれども、言い伝えとして伝えられていること、つまり「伝承」によれば、ペトロは後にローマで、イエス様と同じ十字架では申し訳ないと、逆さ十字架にかけられて殉教したことが伝えられています。イエス様が、「わたしの行く所に、あなたは、今はついて来ることはできないが、後について来ることになる」と言われた通りに。

◆「ついて来る」とは「従う」とも訳されている言葉です。イエス様が十字架で命を落とされたように、ペトロもまたイエス様を信じて、そしてそのようなイエス様との関係を一たびは否認しましたが、否認した者に対するイエス様の愛の貫きのおかげで、彼は再起し、イエス様に従い、同じ道、十字架についたわけです。それでしかし「わたしの行く所に今あなたはついて来ることはできない」言うのは、詩篇117篇にあったように、イエス様について行くというか、イエス様が今進んで行かれる道が、いかなる道であるか、この時点で分かっている人は一人もいなかったと思います。イエス様がどこまで苦しみを受けて、どこまでそこからのぼって行かれるお方なのか。みんな死んでそれで終わる。だからペトロもイエス様に本当について行ったら自分も死んでしまう。だからそのことを恐れて彼は否認したわけですね。けれどもそのイエス様が、予告通り、何度も繰り返し弟子たちにおっしゃったように、「死んで蘇られる」ということを何度聞いても、これを真に受けた弟子たちは一人もいなかったのですね。

◆ところがイエス様が十字架死から三日後の週の初めの日の夕方。ペトロが、「わたしはイエス様のためなら命を捨てます」と言っていたのが三日前のことですね。ところが、三日後、彼は地獄に落ちています。真っ暗闇に落ちています。そこに蘇られたイエス様が現われなさって、「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と言われたのであります。この甦りの主イエス様の御言葉によって、ペトロは地獄から救い上げられるのです。そのようなことをイエス様は見通しておられます。見通した上で「今は、あなたはわたしの行く所について来ることはできない」と、おっしゃったのであります。正にこの御言葉が実現するわけです。イエス様はそのことを予見した上で、「あとでついて来ることになる」とおっしゃっています。この言葉の中には弱さゆえというか、事情により、人間は裏切りもしますけれども、そして本当に闇に落ちるのですけれども、「わたしはその人を決して見捨てない。必ず立ち直ってわたしと同じ道を歩む人に変わり得る。ペトロに何が起ころうが、あなたを見捨てるようなことは金輪際しない」というイエス様の決意表明でもあるとおもいますね。このような短い言葉でありますけれども、ここには本当に人間の人生を総括したような、そして人間がどこまで変えられるか、栄光化されると言ってもよいと思いますが、人間の地獄と天国がありますね。

◆そのようなことでありまして、それこそクラツパート先生の言葉、「ヨハネ福音書は共観福音書を黙想した上でできた福音書です。聖書が何を書いているかということ自分なりに読んで、自分の言葉で言い表した福音書です」。そういう観点で読まれた、ヨハネ福音書の註解書がごく最近出ましたと、教えてくださいました。そのような次第でありまして、ペトロは再起します。そして伝道します。イエス様は弟子たちに、「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と言われました。イエス様が父なる神様から託された務めというのは、人間業ではないわけです。まさに世の救いなのです。そのご自身の務めと同じように、「わたしもあなた方を遣わす」と言われるのです。ですからイエス様の愛というか、期待というか、信頼というか、そういうもの一切を含めた御言葉によってペトロは再起するわけでありまして。上で申しましたように、「ハネ福音書は共観福音書を黙想してできた福音書であります。

◆けれども、わたしは共観福音書だけではないと思います。当然、イエス・キリストの出来事は、それを記した新約聖書、共観福音書は、旧約聖書に記されている事、予言されていることがこのように実現したのです、という記述です。「このように預言が成就した」という表現が共観福音書に何度も出てきますね。ですから、新約聖書は旧約聖書と一体のもので、聖書全体を黙想した上で、成立したのがヨハネによる福音書です。このようにして、ヨハ福音書特有のイエス観・キリスト論が生まれるわけです。その象徴的表現が「わたしはある」という表現です。これは旧約聖書においては、神様の自称なのです。それがヨハネによる福音書においては、イエス様御自身の自称になっているのです。正に神様と御一体の御方がイエス様なのです。すでに読んだところの13章16～20節にこうあります。「はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。わたしは、あなたがた皆について、こう言っているのではない。わたしは、どのような人々を選び出したか分かっている。しかし、『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』という聖書の言葉は実現しなければならない。事の起こる前に、今、言っておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである。はっきり言っておく。わたしの遣わす者を受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」この御言葉は、イエス様と弟子たちの、ひいてわたしたちとの一体性、イエス様と主なる神様との一体性を示しています。「わたしはある」ということが事実であるから、主イエス・キリストは常にわたしたちと共にいまして、すべてを見通して、わたしたちの祈り、うめき、必要に備え、応えてくださる御方であります。「わたしはある」はギリシャ語で「エゴー・エイミー」という言葉です。「わたしはあなたと共にいる」との意味であります。

◆ペトロは、イエス様が予言された通りに、鶏が鳴くまでに三度否認しましたけれども、イエス様はそのようなペトロを見抜いて、しかし、その否認から、イエス様が進んで行かれる道にペトロが歩むということ、そのことを可能にすることができる御愛をイエス様はお持ちなのです。私たちは今、このようなイエス様を、そしてイエス様を、お遣わくださった神様を、そしてわたしたちの上に、とこしえに慈しみとまことをもって、すべてを善に変えてくださる御霊なる神様の御手に包まれて今あります。これからもあります。何が起こり、何がどう崩れても、わたしたちの上に主イエス様は常にいまして、わたしたちをイエス様御自身の栄光にまで導き入れて下さいます。そのような幸いの中にわたしたちは常に置かれておりますから、どこまでも主を信じて御後に従ってまいりましょう。

◆お祈りいたします。

主イエスキリストの父なる神様。聖書に記されているあなたの御言葉は、約束は、全て真実であり、必ず、時満ちて実現されてゆきます。神様、どうかわたしたちが、あなたから賜ったこの聖書を、聖書にある御言葉を本当に信じて、どのような時にも、すべてを、あなたのお約束にお委ねし、どうか主が私たちを愛して下さっているように、互いに愛に生き、そして本当にこの世界が平和になるために仕える一人一人であらしめてください。この祈りイエス様の御名を通し前にお捧げいたします。アーメン。